

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No. 6
2010.10



国際関係学部 国際文化学科
教授 高山 茂

公共図書館をあらゆる地域に

中学校に入っすぐの頃の国語の授業時間。どのような授業内容であったか、いまはもう半世紀を隔てる霧の彼方のこととて多くは思い出せないが、「自分は2,000冊の本を持っているが、本は図書館を利用すればよい」という担当教員の一言は後々までも忘れることはなかった。黒々とした髪を長く伸ばした、リベラルで清新な雰囲気を持ったその教員が、児童文学者として県内では名前の知られた存在であることを、しばらく後になってから知ったが、その教師の所有する2,000冊という本の総量は、想像してみても膨大な数という以外理解しようがなかった。この時以来2,000冊という冊数がずっと後まで私の収集する本の目標値となった。

教師のアドバイスどおり、私は中学校の図書室に結構頻繁に足を運ぶようになり、それまで文学作品などは「カバヤ文庫」（現在「カバヤ文庫」は岡山県立図書館の電子図書館システムで読むことができる）のダイジェストでしか読んだことのなかった私は、文学作品中心に借りられるだけの本をせっせと借りて読んだ。それで1年生のときには14クラスあった同学年の中で私の借出し冊数が2位ということであったが、しかし、多数の本に接するうちに「本は図書館を利用すればよい」と言った国語教師の言葉に一面では疑問を抱くようになった。図書室で本を借りて読んでいる限り、当然のことながら本は手元に残らない。愛着を持った本はいつもそばに置いて好きな時に読み返したいと思うにつけ、その教師がなぜ多量の本を所有しているのかという理由の一端もわかったような気がした。自分の本が小さな書棚に少しずつ数を増していったのは、その後何年もしてからのことである。

いま振り返って残念なのは公共図書館がすぐ近くになかったことであるが、図書館との出会いの原点はまさしくこの図書室であった。現在に至るも図書館通いは私の生活のサイクルの一部となっており、多大な恩恵に浴している。そして図書館はすべての人にとって必要かつ重要な施設であるという思いはますます強くなってきており、図書館と本の魅力を最初に教えてくれた国語教師のことも以前より頻繁に思い出すようになった。

ところで、図書館は一般的に国立図書館・公共図書館・大学図書館・学校図書館・専門図書館・その他の図書館に区分されている。このうちもっとも多くの人々が利用するのが全国各地に設置されている公共図書館で、万人に開かれた図書館だといってよいであろう。2009年（平成21年）の統計によると、全国の公共図書館の総数は3,164館、総蔵書数は4億冊に達しようとしている。ちなみに1955年（昭和30年）の統計では公共図書館総数は715館、総蔵書数は1千300万冊弱であるから、54年の間に図書館数で約4.4倍、蔵書数で何と約30倍も増加したことがわかる。「カバヤ文庫」が当時の子供たちを夢中にさせた大ベストセラーとなった時代背景の一つに、公共図書館の整備がまだまだ遅れていたことがあげられるであろう。

以上の統計は日本図書館協会発行の『日本の図書館』によったが、本書は1952年以降毎年データを更新して発刊されており、日本の図書館の規模・職員数・受入冊数・予算額等々、あらゆる動向を知ることができる。2009年の統計によってもう少し公共図書館の現況を眺めてみることにする。

公共図書館は館数、蔵書数ともに、この半世紀余りの間に飛躍的に増加したことは上述したとおりであるが、設置自治体数を見る限りとても喜べる状況ではない。すべての市区に市区立図書館を有しない自治体が北海道ほか9県にみられる。町村に



▲ 北杜市立中央図書館（金田一春彦記念図書館）

次項に続く▶

至っては設置率100%を数えるのは3県のみで、あとはすべての都道府県において図書館のない町村があり、最も設置率が低い県では20町村中、14町村が図書館を持たない。2009年の統計における全国の町村自治体数は995、そのうち図書館のある町村は528であるから、まだ467もの町村に図書館がなく、平均設置率は53%強にとどまる。つまり半数近くもの町村が図書館を有しないのである。

このような現実には嘆息するのはまだ早い。上記の数値は市町村合併が終りに近づいた段階のものである。「平成の大合併」といわれた市町村合併は1999年4月から全国規模で推進され、2010年3月に一区切りとなった。その結果、合併直前の1999年3月31日に3,232あった市町村数は1,727に減ずる結果となった。合併によって消滅した町村自治体は、もうデータ上にあがってこないのである。

ここで市町村合併がはじまる1年前の1998年の統計を見てみよう。2,562町村中、図書館を持つのは885町村、設置率35%であるから、全国の3分の2ほどの町村に図書館がないということである。最も設置率が低い県では35町村中、図書館があるのは5町村のみである。合併が一区切りを迎えた現在でも、旧町村自治体域における図書館設置数の状況はそれほど変化していないと思われる。全ての町域に図書館を持たない市では、支所の置かれている地区の公民館に図書室を設けて対応しているところもあるが、蔵書数もきわめて少なく、司書どころか専従の職員もいないところがある。過疎化や高齢化が進んだ地域に図書館の空白地帯が広がっているようである。また、図書館であれば、最少でも5、6万冊程度の蔵書は必要ともいわれるが、人口1万5,000人未満の町村立図書館のうち、とくに人口の少ない町村図書館の多くがその冊数を下回っている。

公共図書館に関しては、都会と地方、さらに地方でも都市部と農山村部において格差が大きい。全国都道府県でもっとも図書館数が多いのが、人口が抜きんで多い東京都であることはいうまでもない。ことに23区部とその周辺の市部に集中しており、それぞれ区・市域にいくつかの図書館を配置して利便性を高めている。その区・市に居住・勤務していなくても一定の周辺地域の住民であれば本の貸出サービス等が受けられるようになっているが、杉並区立図書館などのように原則として利用者の居住地を問わずサービスが受けられるところもある。区・市民以外に限りある本を貸し出すことについては賛否あるようだが、複数の公共図書館に登録でき、かつインターネットで貸出状況の確認や予約ができる現在では、利用者にとってむしろありがたい措置だといえるであろう。また、2007年にはコンシェルジュ（案内人）の配置、Web図書館の運用、開館時間の延長などこれまでにない公共図書館の形態をめざした、千代田区立千代田図書館がリニューアルオープンした。その経緯と新機軸については、千代田図書館改革の推進者であった元館長柳与志夫氏の『千代田図書館とは何か』（ポット出版）に詳しく記されている。

東京をはじめ都市部では身近なところにサービスの整った公共図書館が存在しているのであるが、町村部においてはまだまだ図書館の数が不足していることは以上の通りである。イギリスには約5,000の図書館があり、町々に行きわたっているようである。イギリスの人口は日本の約半分だから、日本の人口でいうと約1万館あることになる（『新版図書館の発見』）。日本では

中学校区に一つの図書館をというのは悲願でもあるが、人口比でイギリスと同数の図書館があれば、1万1,000弱ある中学校区のほとんどに図書館を置くことが可能な計算となる。

日本の公共図書館の資料費（図書購入費等）は1999年のピーク時より数十億円も削減され、専任職員数も大幅に減少している。このような社会情勢の中で新たな図書館建設には幾多の困難がともなうことであろうが、やらねばならないことである。同時に既存の町村図書館の拡充・整備も必要であろう。

作家の井上ひさしが、ふるさとの山形県川西町立図書館に贈った蔵書をもとに「遅筆堂文庫」が誕生した。この寄贈がきっかけとなって人口1万8,000人に満たない川西町で、町立図書館や劇場を併設する川西町フレンドリープラザが建設された。井上ひさしが贈った冊数は最終的に22万冊に達したという。遠藤周作も小説『沈黙』の舞台となった長崎市外海町に生原稿、蔵書など3万点を寄贈・寄託したことにより、現在の長崎市遠藤周作文学館が生まれた。学者では日本語学者の金田一春彦博士が、ハケ岳山麓の山梨県旧大泉村に山荘を持っていた縁で、当村に方言関連の蔵書2万冊を寄贈したことにより「金田一春彦ことばの資料館」が開設、北杜市に合併後は北杜市立中央図書館金田一春彦記念図書館となった。また、鳥越文蔵元早稲田大学演劇博物館長は佐渡の旧畑野町猿八地区（現佐渡市）に近世演劇関連図書を中心とする蔵書2万冊を寄贈したことによって、瀟洒な木造平屋建ての鳥越文庫が誕生、佐渡の文化的拠点の一つとなっている。猿八には教え子の西橋健氏が住みついて、佐渡の代表的な民俗芸能である「文弥人形」の継承に取り組んでいるのが縁であった。

ほかにも作家・学者ほかによる地域への蔵書寄贈の例は多くあるに違いないが、上記はまとまった書物の寄贈がいかに地域に刺激を与え、活性化をもたらすかの一例である。今後ますますこういった例は増えていってほしいが、加えて全国の各種図書館から官庁、企業、団体、個人までの間で不要となった本を地域に流通・配分できるようなきちんとしたシステムが確立されることを願っている。難しい点は多々あると思われるが、これによって少しでも蔵書数の少ない図書館の拡充をはかることが可能となるであろう。

大学図書館はよく大学の心臓部だといわれるが、では公共図書館は何にたとえられるであろうか。さしずめ日本列島の頭脳であるといっても、それほど的外れではないであろう。であるなら、公共図書館は日本の文化力、日本人の知力のバロメーターであるといえよう。今後、もっともっと公共図書館の設置、拡充・整備に取り組んでいかなければいけない大きな理由の一つがここにある。



▲ 杉並区立中央図書館

● ESSAY

ロンドン大学LSE図書館点描

国際ビジネス情報学科 吉田 克己

25年ほど前のことである。海外派遣研究員（長期）として、1年間ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）で財政学の研究活動に携わる幸運に恵まれた。周知のように、LSEは、社会科学全般、とくに経済学の分野での教育・研究に定評があり、二つの図書館を備えている。メイン図書館は、4階建てのLionel Robbins Buildingに入っているBritish Library of Political and Economic Science (BLPES)で、キャンパスでの時間の多くをここで過ごした。この図書館は、世界最大の社会科学専門図書館といわれ、およそ300万冊の蔵書と100万点にのぼるパンフレット・手稿等を誇っている。2階から上が開架式の閲覧室で、中央の書架を中心として、その周囲にぐるりと机が配されている。開館時間の9時ともなると、多くの学生が来館し、またたく間に窓際の明るい席から埋まっていく。1ヶ月ほどが過ぎた頃、学生たちのある行動が気になりはじめた。それまで熱心に机に向かっていた学生が、その机の上に本を広げたままだしとときき席を離れ、しばらくするとまた戻ってくるのである。学生たちは、こうした行動を繰り返している。最初は、トイレか休憩のためだろう思ったが、そうではなかった。館員に尋ねたところ、学生たちのこうした行動は、授業に出席するためであったのである。かれらは、図書館と授業教室とを、一日に何度も行き来していたのである。ここにも、LSEの学生たちの猛烈な勉強ぶりが現われている。

LSEには、もう一つ図書館がある。Old Buildingの6階にある図書館（The Shaw Library）である。これは、著名な社会主義

運動家バーナード・ショーの寄贈により1940年に設けられたもので、落ち着いた雰囲気をもつこじんまりとした研究者用の図書館である。ここも、たびたび利用した。そのたびに、やや薄暗い閲覧室の片隅にある同じ席に座り、卓上の書見台に置かれた古書を天眼鏡で見ながら繰っている、80歳前後と思われる白髪の男性を見掛けた。その一隅だけが卓上灯で明るく照らし出され、まるで古い時代に描かれた西洋絵画を見ているような錯覚に見舞われた。その光景は、脳裏に鮮明に焼きつけられている。この人物の正体をどうしても知りたくなって、やはり館員に聞いてみた。この男性は、長年LSEで教鞭をとって退職されたが、その後も研究への意欲は衰えず、ほとんど毎日のようにこの図書館を訪れているとのことであった。当時、同じく研究活動に身を置く者として将来はかくありたいものだと願ったことを、いまでも覚えている。はたして、このささやかなわたしの夢は実現するのだろうか。



● ESSAY

図書館の活用とこれから

食物栄養学科 太田 尚子

いつの時代も図書館の存在意義がとても大きいことを皆が認めることでしょう。

大学や教育機関にある図書館だけでなく、市民の為にある公共の図書館などその形態はさまざまですが、振り返ってみると人は幼少から大人に至るまで色々な形で図書館を利用してきたと思います。筆者もその一人で、明白に記憶している最初の利用は中学時代です。夏休み、家ではなかなか集中できない受験勉強をするために、毎朝、中ノ島の中央公会堂に隣接する図書館の自習室に入るべく、開館2時間前（朝7時前）には入り口に並んだものです。当時の夏場の生活にはクーラーといったものはほとんど存在しなかったのですが、石造りの中ノ島図書館に一步入るとその建物の重厚感とひんやりとした空気に包まれたものです。朝から閉館の午後9時まで一日中図書館で過ごすのですがその長い一日のうちで一番の楽しみは、中学生ながらにして自分自身の昼食を選食できる図書館食堂でのひと時でした。午前中はそれを励みに勉強したことを今でも鮮明に覚えています。

時が流れ、大学院時代には研究の遂行の為、実験の待ち時間を利用して文献探しに付属図書館に行ったものです。ケミカルアブストラクトでキーワードから適当な論文を一生懸命探しあてた。当時はインターネット検索などなく、適切な論文を探しあてるのは骨が折れました。その後教員として大学に勤務し、そろそろ25年が経過しようとしています。その間のネット環境の発展には目を見張るものがあり、ここ10年間はずいぶん電子ジャーナルや図書館間の相互貸借システムにお世話になっています。これは競争の激しい研究分野には不可欠なツールとなっています。このように、とりわけ大学図書館は学生や教職員にとって本当にありがたい存在ですが、社会人枠で入学してきた学生さんなどは、学内で静かに過ごせる場所として図書館を利用しているということを聞き、その存在意義の深さを再確認するこのごろです。

● STUDENT'S VOICE

心地よく刺激ある場所

国際関係学科 三年 中村 綾香

図書館には二つの楽しみ方があります。

まず始めに、学ぶ楽しさです。図書館一階では大きな机が並べられ、ゆったりと勉強出来ます。日本国内、海外の様々な雑誌や新聞も数多くあるので、調べ物学習や就職活動に大変便利です。入って少し行った左手には、レベルごとに分けられた薄い英語の本があります。それらは多読のトレーニングに非常に役立ちます。薄くて読みやすく種類も豊富なので、無理なく読み続けることが出来ます。図書館二階では個別に仕切られた勉強机が所狭しと並んでいます。静かで落ち着いて勉強出来る環境にあるので、自宅ではなかなか気が散ってしまい勉強出来ない人には最適です。私も資格に向けての勉強やレポート作成、読書や宿題をするのによく利用しています。二階には旅行の本も置いてあるので、休憩がてらに読むのも良いし、旅行に向けてその本を有効利用することも出来ます。日本国内だけでなく、海外の国別ガイドブックもたくさん置いてあります。図書館二階には、国際機関資料室もあります。この国際機関資料室というのは全国でも数が所しかないで、とても貴重です。ここでは、毎年五月にEUに関するイベントが行われます。北欧の

食文化など、毎年面白いテーマ、内容を私たち学生に分かりやすく展示してくれています。司書の方々とのお話も楽しいです。また、国連に関する貴重な資料や、戦争、国際協力、ボランティアなどの本も数多くあります。貸出しも出来るので、気軽に利用してみてください。

二つ目に、知る楽しさです。図書館一階にはパソコンがあり、そこで蔵書検索することが出来ます。図書館奥にある書庫にも沢山の本が保管されています。そこには表には収容しきれなかった様々な種類の本があるので、新たな発見があります。興味がなくても、ふと手に取った本を読んでもみるのも楽しいです。自分から自発的に本を探したり、新聞を読んだりすることで、自分の知らなかったことを新たに知ることが出来ます。実際に私もボランティアに興味はありませんでしたが、ふと手に取った本を読んで興味を持ち、最終的にカンボジアまでボランティアをしに行っていました。

このように、図書館にはただ情報を得るだけでなく、未知なる発見、未来への可能性が詰まっていると思います。図書館を最大限に利用して、これからの自分に役立てて下さい。

● WRITTEN BOOKS

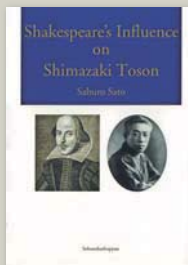
刊行物紹介



『現代韓米関係史—在韓米軍撤退の歴史の変遷過程 1945~2008年』

鄭 勳燮 著 [朝日出版社]

本書は、1945年から2008年までの63年間の韓米関係を、その同盟関係の「物理的装置」とであると言える在韓米軍の撤退の歴史を総合的・実証的に分析、考察したものである。とくに、二国間同盟関係における強大国と弱小国との間に内在する同盟ディレンマ、すなわち「〈連累〉(entrapment) - 〈放棄〉(abandonment) 構造」に着目し、計6回の在韓米軍撤退の歴史を再検討している。各章では、米政府による在韓米軍撤退政策を分析するため、当該時期の米国の世界戦略(グローバル側面)および東アジア戦略(リージョナル側面)、そして政策決定過程(decision-making process)という分析単位を設定し、さらに各章の最後の部分では、米国の撤退政策に対する韓国の歴代政権の反応(ローカル側面)を分析している。実証分析を進めていくうえで、以上の四つの分析単位を設定し、戦後の韓米関係を一つの一貫した論理で体系化しようと試みている。



『Shakespeare's Influence on Shimazaki Toson』

佐藤 三武朗 著 [双文社出版]

我が国の現代文学が西洋文学の影響を受けて、大きく発展したことは知られている。本書は、島崎藤村がシェイクスピアの影響を如何に深く受けたかを研究したものである。

島崎藤村と言えば、『若菜集』などの詩人として有名である。藤村が詩人から小説家に転身した際に、シェイクスピアの作品、とりわけ『ハムレット』との邂逅によって、その作家生活が急転回し、『破戒』や『春』や『桜の葉の熟する時』などの作品を生み出すに至ったというのが本書の概要である。世界の研究者に読んで欲しいと望み、私はアメリカで口頭発表し、あるいは論文発表したものを出版した。

発表を通して、アメリカに多くの友人を得た。彼等は日本文学への関心を深めたようで、私の満足はさらに高まった。これからも藤村とシェイクスピアの影響関係について研究を続けたいと思う。



『闘う牧師 田村直臣の挑戦』

梅本 順子 著 [大空社]

「日本初」に果敢にチャレンジした牧師であり、「国際人」と呼ぶにふさわしい田村直臣の激動の生涯を描く。アメリカの神学校の卒業生第一号であり、また名誉学位とはいえプリンストン大学からMAを取得。留学中に「宗教教育」を知り、帰国後は苦学生のための育英施設を運営、また、日曜学校運動に熱心で、そのテキストとして言文一致体で児童文学を翻訳・発行した。自称、「日本初のフェミニスト」で、婚約者をアメリカ留学させた。アメリカで発行した英文の自著『日本の花嫁』を和訳・出版しようとして、当時のナショナリストのみならず、日本基督教会からも糾弾され、牧師職を剥奪された(花嫁事件)。



『太平洋郵船と国際交流』

濱屋 雅敏 著 [開成出版]

太平洋郵船は、1867年に、サンフランシスコと横浜と香港を結ぶ太平洋横断定期蒸気船航路を初めて開いたアメリカの海運会社である。本書では、この会社が内蔵し、関わっていた交通・運輸・観光の文明的・文化的体系や、同社が果たした国際交流上の役割を、1906年のカリフォルニア地震との関係において解明している。さらに、同社の基盤だったカリフォルニアの動向を、サンフランシスコに焦点を当てて明らかにしたものである。国際交流の媒体の主力が汽船から航空機に替わった現代とは異なる、近代独特の様相を見せている本である。



『経済学的基本原理と諸問題』

大淵 三洋 編著 [八千代出版]

川戸秀昭・伊藤栄晃・相馬敦・葛目知秀・金子憲

初期の段階において、経済学は、現実の経済現象とそれほど乖離したものではなかったが、現代においては、経済学の学説と理論は、過去と比較にならないほど複雑となり、経済学の基礎知識を習得することなくしては、到底理解することができない。今日の経済学者の関心は、ミクロ経済理論とマクロ経済理論の発展に向けられているといつてよいであろう。

さらに、分析の対象、総括の対象となる経済現象もますます複雑なものとなっている。当然のことながら、それに対応する経済理論は、精緻なものとなり、統合分離される必要性が生じてきている。

本書は、経済学的基本原理を中心にして、経済社会の時代的要請に応じて、現在、特に、問題となっている経済現象のうち、重要と思われるものを付加した。

所蔵資料紹介

江戸時代の
料理本のコレクション

国際交流学科 小田切 文洋

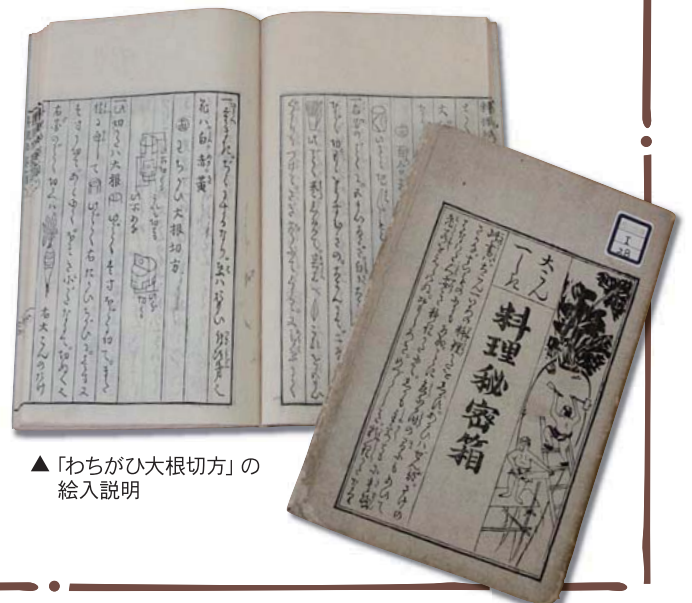
国際関係学部は、昨年めでたく三十周年の記念の年を刻んだ。学部の前身は三島予科に始まる。開設されたのは、昭和二十一年（1946）である。予科の開設時から数えれば六十四年になる。歴史が長いだけに本図書館の所蔵する和洋書のなかには、日本大学の他学部ではなかなか披見することが難しい書籍も所蔵されている。静岡県から文化財の指定を受けている虎関師錬編『聚分韻略』（作詩の際の押韻の基準を示した字書的一种）などに代表されるような貴重書もある。今回は、図書館長も務められた故内山一也教授の寄贈された江戸時代の料理本のコレクションを紹介したい（教授は、江戸時代の食器も寄贈されている）。料理本は、食品の種類、調理の方法、献立、配膳などを記した書物をいう。料理本は、江戸の初期から刊行されているが、増加するのは1700年代後半になってからである。江戸時代に寿司や蕎麦など日本の食文化の基礎が作られたことはよく知られている。江戸の中期から後期にかけての食文化の発展ぶりは料理本の増加を考え合わせてみるとよく分かる。

今も営業をしている料亭八百善の初代主人の著した『料理通』全四篇（1822—1835板）という料理本がある。この書には亀田鵬斎、大田南畝、酒井抱一、谷文晁、大窪詩仏、東条琴台ら当時一流の文人たちが筆跡や絵を寄せている。挿絵の一つには、酒井抱一や大田南畝ら八百善の常連たちが食卓を囲んでいる情景が描かれている。このような情報を得られることから、料理本は単に食文化を知る資料であるばかりでなく、江戸時代の文人の日常を考える意味でも重要である。

さて、内山教授の料理本のコレクションを具体的に見ていきたい。コレクションの特色は、江戸時代を通して主要な料理書が集められているのが特色である。点数は、料理本の板本が44種、料理本の写本が28種、菓子本の板本が5種である。内山教授には、『俳諧食物考』桜楓社、1974年9月という大著があり、この研究のために、これらのコレクションを集められたものと思われる。内山教授は、若い時代には北大路魯山人に師事されるなど、趣味人の風貌を持たれた先生であった。『俳諧食物考』の中に江戸時代の料理本の解説が収められている。料理本の調査・研究には、この他に吉井始子氏のものがあり（「解題」『翻刻江戸時代料理本

集成 別巻』臨川書店、1981年10月）、これらを参照すると江戸時代の料理本の全体像を知ることができる。

百珍物といわれる料理本がある。百珍は、多くの珍しいものという意味である。この百珍物について、内山教授は「それまでの形式にとらわれた献立を無視し、一つの食品をどうやって料理したら一番うまいかを徹底的に追求するのである。これが「百珍物」と呼ばれる料理書であるが、その出版され始めたのが天明である。また、てんぷら、かばやきが一般に流行したのも、およそ天明頃からである」と、その重要性について書かれている。コレクションには、百珍物として『豆腐百珍』、『豆腐百珍続篇』、『新著料理柚珍秘密箱』、『大根一式料理秘密箱』、『鯛百科珍料理秘密箱』、『甘藷百珍』、『海鰻百珍』が収められている。甘藷は当時の救荒食で時代の要請に応えたこの本は版を重ねている。海鰻は鰻のことで、関西では昔から珍重されてきた。本を保護する袋が珍しく残っている『大根一式料理秘密箱』の書影を最後に載せて、江戸時代の料理本の雰囲気を示したい。袋にはユーモアのある絵と次の一文が刷られている。「此書は。大こん一いろの料理かたをしるす。あるひはぜん部。さけのさかな。すいものにも相成。ことに急なる時の間にもあひてはなはだ心安き料理かたにて。しかも主客とも貴賤老若をえらはぬ。おもしろき。めづらしき。料理かたなり」。大根の切り方が詳しく述べられているのがこの本の特色になっている。



▲「わちがひ大根切方」の
絵入説明

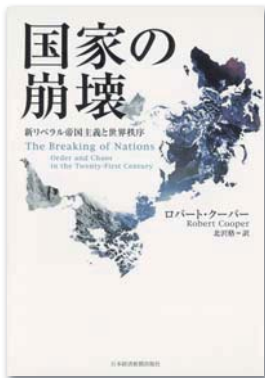
推薦図書紹介

● RECOMMENDED BOOKS

『国家の崩壊—新リベラル帝国主義と世界秩序』

ロバート・クーパー 著／北沢 格 訳 [日本経済新聞出版社]

国際関係学科 黒川 祐次



イギリスの外交官の能力は高い。英語が母国語だから元々有利だが、私はそれ以上に、彼らの歴史への理解と現実主義に裏打ちされた冷静な判断力と堅実な行政能力に感心することが多かった。

そのイギリス外交官の中でも飛びぬけた存在が本書の著者ロバート・クーパーだろう。ブレア政権の外交戦略を作ったといわれ、その後はEUの外交・戦略問題の実質上の責任者となった。2005年にはイギリスの『プロスペクト』誌で「世界最高の知性100人」にも選ばれている。

本書は、ポスト冷戦世界を理解する枠組みを提示しようとする試みである。著者は、国家の進化を「プレ近代国家」、「近代国家」、「ポスト近代国家」と捉える。ポスト近代国家とは、帝国や勢力均衡といったこれまでの国家原理を捨て、内政と外交を峻別する世界を

超えようとする冷戦後のヨーロッパをモデルとした国家像である。そして著者は、現在の世界では、この三種の国家が並存しているが、世界がポスト近代国家に向かうことが望ましいとしている。

ただ、このように結論を要約するだけでは本書の魅力を十分に伝えることにはならない。本書で最も味わうべきは、歴史への該博な知識と現実への柔軟な姿勢からくる著者の大人の洞察が随所にちりばめられていることである。

最後に、本書を読んでとりわけ気持ちよいのは、著者が、世界史の中での日本の位置というものを正当に評価していることである。日本語版への序文に16ページを費やしているが、それ自体が堂々たる論文となっている。

熟読に値する一冊である。

『近代日本の分岐点—日露戦争から満州事変前夜まで』

深津 真澄 著 [ロゴス]

国際文化学科 北岡 和義



歴史理解にはその時代の空気を読むことが大切だ。朝鮮半島をめぐる清国、露国との覇権争い、という安全保障上の急迫した事態があったかもしれない。日清・日露の戦争に勝利、日本は欧米列強と肩を並べる大国をめざした。1910年の韓国併合から100周年である。

勝ったことで視線が中國大陸に注がれ、野望の炎は次第に大きな火柱となって燃え上がる。本書はそうした時代の空気に煽られたリーダーたちに鋭い警告を発した言論があったことを教えてくれる。

小村寿太郎、加藤高明、原敬、田中義一という日本の近代を指導した国家のリーダーを縦糸に、ポーツマス条約や対華二か条要求など歴史の事象を横糸に編み込んだ歴史読物で、書名通り「近代日本の分岐点」を大正デモクラシーと重なり合う二五年間にフォーカスしている。

本書で一人異彩を放つのが経済ジャーナリスト、

石橋湛山である。石橋は「青島は断じて領有すべからず」と題した論文で、「朝鮮、台湾、満州、樺太を棄てよ、中国、シベリアへの干渉をやめよ、アジアの民衆はやがて立ち上がり、われわれの手から独立を奪うであろう、それならば、むしろ彼等に独立を進んで与え、尊敬と信頼を得た方が得だ」。しかし石橋の真つ当な主張は時代の空気に抗した異端の言説と言われた。

戦後、石橋は沼津、三島地区を選挙区に代議士に当選、宰相になったことは周知の事実。

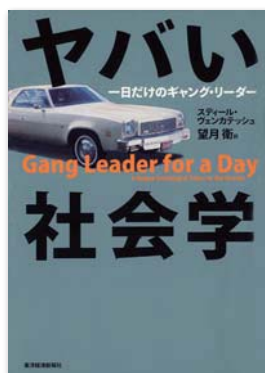
中國大陸に侵攻、対米戦争に突入、敗戦。その愚の歴史からばくら日本人は何を学んだのか。

鳩山政権が自滅した。菅直人は首相就任に当たって普天間移設に関し日米合意を堅持する、と声明した。日米同盟こそ正義である、と信じて疑わない現在の「空気」に抗する異端の言説は無いのか。本書は昨年、第30回石橋湛山賞を受賞した。

『ヤバい社会学—一日だけのギャング・リーダー』

スティール・ヴェンカテッシュ 著／望月 衛 訳 [東洋経済新報社]

国際交流学科 藤田 結子



社会学の調査方法の1つに「参与観察」がある。これは、文字通り、調査対象の組織やコミュニティに参与し観察する方法だ。調査者は、その現場に一歩足を踏み入れた後、たいい複雑な人間関係に巻き込まれたり、とんでもない場面を目の当たりにしたりする。しかし、そこでの体験の詳細は、堅苦しい研究書や論文からは省かれてしまう。

本書はそういった参与観察の裏話である。しかも、ありきたりの学校組織や移民コミュニティの話ではない。ギャング・リーダー、ドラッグの売人、売春婦などが集まる、アメリカ「最悪」といわれるゲットーでの体験談である。当時大学院生であった社会学者

ヴェンカテッシュ氏は、論文の調査のため、シカゴの低所得者向け集合住宅ロバート・テイラー・ホームズに飛び込んだ。彼は、麻薬売人ギャング・リーダーのJTに見込まれ、友情を育み、本書の原題通り「Gang leader for a day (1日だけのギャング・リーダー)」となったのだ。ブラック・カルチャーや若者の生活・人間関係など、学生の皆さんにとっても興味深い点が数多く描かれているだろう。

彼はこの参与観察をもとに、貧困やスラムに関する数々の意義深い論文発表や問題提起を行った。この本をきっかけに、ぜひ社会学のフィールドワークに関心を持ってほしいと思う。

『裸でも生きる—25歳女性起業家の号泣戦記』

山口 絵理子 著 [講談社]

国際ビジネス情報学科 堅尾 和夫



本書は、「マザーハウス」という途上国発ブランドのバッグを製造販売する会社を設立した山口絵理子さんの幼少時代から、マザーハウスの創業までの一つの生き方を綴った奮戦記である。

小学校でイジメにあったことから始まり、中学校で非行に走り、強くなりたいと工業高校の有名柔道部へ入部し男顔負けの猛特訓の高校生活から一転、猛勉強をして大学へ。大学時代に開発学を学び、ワシントン国際機関でのインターンを経て、本当の現場を見たい、机上の空論ではなくて自分の目で見なければいけないと単身アジア最貧国バングラデシュに渡る。2年間の滞在後、「この地に希望の光を灯したい」と考え、起業を決意する。思い立ったらすぐに実行に移すこの行動力は、いったいどこから生み出されるのだろうか。

様々な壁にぶつかり、何度もくじけそうになり、裏切りにあいながらも決してあきらめず、踏み出すパワーとなったのは、この当初の「想い」であり、やがて使命感となって山口さんを支える。この「想い＝志」こそが、多くの人たちの共感を呼び、自分自身の人生について考えるきっかけとなり、踏み出す勇気を与えてくれる。

「君はなんでそんなに幸せな環境にいるのに、やりたいことをやらないんだ？」と、バングラデシュの人たちが自分に問いかけているような気がしたというエピソードの一節は、若者だけではなく今を生きている日本の多くの人たちに問いかけている。

『恋文の技術』

森見 登美彦 著 [ポプラ社]

商経学科 川戸 秀昭



近年、インターネットや携帯電話の普及が進むにつれ我々の生活の中から手紙を書くという作業が格段に減ったのは現代の大きな、そして、悲しむべき変化である。この小説は大学院生の主人公が僻地の研究所に武者修行に行かされ、有り余る時間の中で友人たちに手紙を書きながら自らの文通技術の向上に励むという内容であるが、物語自体も主人公のおびただしい数の手紙を通じて進行していく。手紙を読む形で展開が新鮮であること、非常にテンポの良いストーリー展開であるということで読者も飽きさせない。また、手紙を書くことの大切さ、面白さを自然に教えてくれる内容でもある。本文には《手紙を書いている間、ポストまで歩いている道中、返信が

来るまでの長い間、それを含めて「手紙を書く」ということ》とあった。まさに手紙を書くことの醍醐味がここに凝縮されている。手紙を書くことは言わば相手に対して自分の大切な時間を相手のことを考えながら使うことであるのだ。確かにメールや携帯電話は非常に便利な道具ではあるが、それによって手紙という非常に長い歴史を持つ文化が損なわれるのは残念なことでもある。私自身にとっても、人生の中で様々な人々から届いた手紙には、思い出や当時の記憶が詰まっており、生涯の宝物にもなっている。学生諸君にはこの小説を通じ、手紙を書くことに少しでも興味を持ってもらえたらと切に願う次第である。

『生物と無生物のあいだ』

福岡 伸一 著 [講談社]

食物栄養学科 室伏 誠



書店で新書のタイトルを見ることは楽しい時間である。私の専門である細胞学や遺伝学など「生命科学」に関するタイトルはめったにないが、もしかしたらという期待感もある。しかし、生命科学の本はベストセラーとは無縁と思っていた。そんな中、分子生物学者である福岡伸一氏が書いた本書で奇跡が起きた。新書として2007年（本書）、さらに2009年（『世界は分けてもわからない』）が立て続けにサントリー学芸賞を受賞し、本書は65万部を突破し、多くの著名人が推薦者として名を連ねている。

本書は、著者がポストドクとして米国において研究者としての第一歩をスタートさせるNYのロックフェラー大学の研究生活から始まる。研究活動はその後ボストンのハーバード大学に移り、最先端の研究が

過酷なほどに展開されていく様が如実に描写されている。ライバルとのしのぎ合い、ゴールを目指す創意工夫、いずれにしても「生命科学」に必要なことは真実である。本書を読んでいると、米国における研究者としての生活の描写や著名な研究者の記述も見事で、話の中に吸い込まれていく。世界に名だたる分子生物学者である著者が、最先端の「生命科学」を極上の科学ミステリーに作り上げたことは、驚きの一言である。

私の研究の師である、国立遺伝学研究所の故吉田俊秀博士の言われていた「科学はその最も基本となる基礎研究が、最も大事なんだよ」という言葉を思い出す。

国際機関資料室から ● INTERNATIONAL DOCUMENTATION CENTER



日・EUフレンドシップウィーク2010

「EU加盟27カ国の食」開催

EU情報センターを設置している国際機関資料室では、毎年5月9日のヨーロッパデーを記念して、日本とEUの交流を目的とするイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

今年は、5月10日(月)～5月28日(金)まで、図書館1階閲覧室及び国際機関資料室内にて、「EU加盟27カ国の食」というテーマで展示会を開催しました。

EU加盟国が27カ国ある現在、シェンゲン協定によりパスポートなしで国境を通過でき、ユーロ導入国も16カ国に増えEU統合が進められる中、各国独自の食文化は大事にされ、多岐にわたっています。1階の展示「EU加盟27カ国の料理」では、そんな27カ国それぞれの国の料理や食文化をまとめパネル展示し、美味しそうな写真に来場者の関心が集まりました。



▲ 試食会の様子



▲ 1階 閲覧室の様子



▲ 2階 国際機関資料室の様子

2階の国際機関資料室では、「EUのスイーツたち」や「EUの基礎知識」などを展示。また、図書館所蔵の図書「世界の朝ごはん」や「地球の食卓」、「地球の歩き方」などからEU加盟国について抜粋したものを展示し、特に女性陣に人気をばくしました。

今回は、1階の展示の中から出題されたクイズに答えてもらい、2階の国際機関資料室にて粗品を渡しました。粗品はEU加盟国のチョコレートやキャンディーを袋詰めにしたもの、またはEUから送付されたオリジナルボールペン、オリジナルメモパッドの中から選んでいただきました。

また、15日(土)と22日(土)には、DVD上映会として「FLY!FLY!FLY! ヨーロッパ 4カ国食の旅」を上映。試食会としてDVDの中で食されていたチーズやオリーブ、パテなどの試食品を提供しました。

今年も先生方により、授業やゼミの一環として多くの学生を引率していただき、EUやEU加盟国にふれていただくことができました。

● INFORMATION

2010年「国民読書年」とは・・・？

今年は、「国民読書年」にあたります。

国会では、深刻化する活字離れが危惧される昨今の状況を踏まえ、文字・活字によって伝えられてきた知的財産を継承・発展させるため、「文字・活字文化振興法」の施行5周年にあたる今年を「国民読書年」に制定し、政官民協力のもとで国を挙げてあらゆる努力を重ねることが宣言されました。

つまり、2010年「国民読書年」は、国民が本や新聞の面白さを伝えあう年

で、日本人は、世界に誇る読書文化の歴史を持っており、そのよき文化を発展させる新たな契機とし、読書人口の拡大と国民総読書量の底上げに向かう初年度としたい等が、この「国民読書年」制定の目的ということです。

学生諸君もこの「国民読書年」を契機として図書館を今以上に活用し、立派な本の虫になってくれることを期待します。図書館もより充実した蔵書を揃えるよう努力いたします。

日本大学国際関係学部図書館報

BIBLIOTHECA

第6号

通巻第151号

発行日/2010年10月1日

編集・発行/日本大学国際関係学部
図書委員会<http://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/>